

Little DJ ～小さな恋の物語～

2007(平成19)年11月8日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督・脚本＝永田琴／脚本＝三浦有為子／原作＝鬼塚忠『Little DJ ～小さな恋の物語～』（ポプラ社刊）／出演＝神木隆之介／福田麻由子／広末涼子／西田尚美／石黒賢／原田芳雄／佐藤重幸／村川絵梨／松重豊／光石研／森康子／特別出演＝小林克也（デスペラード配給／2007年日本映画／128分）

…… 1960年代後半、私の大学時代は『ヤンリク』と『ヤンタン』が完全に生活の一部だったが、今ラジオの存在意義は……？ 舞台は1977年の函館。主人公はDJに憧れる中学1年生だから、『年下の男の子』をはじめ、70年代の名曲がいっぱい！ ちょっと食傷気味の難病モノだが、1976年の名作『ラストコンサート』と対比しながら、白血病の悲しみを再確認……？

主人公たちや監督たちのラジオ歴は……？

この映画は1977年の函館が舞台。1964年生まれでこの時12歳の主人公高野太郎（神木隆之介）は中学1年生、そして海乃たまき（福田麻由子）は1つ年上の中学2年生。他方、この映画の原作『Little DJ ～小さな恋の物語～』を書いた鬼塚忠は1965年生まれだから太郎やたまきと年代だし、1971年生まれの女性監督永田琴や1973年生まれの脚本家の三浦有為子は原作者よりももっと若い。

したがって、太郎とたまきそして原作者鬼塚忠の年代では、ラジオを聴いていたとしてもそのラジオ歴はわずかのはず。太郎は1974年に巨人ファンとなって王選手に憧れ、1975年にリトルリーグに入団し、父親の正彦（石黒賢）からお下がりラジオをもらって野球中継の真似を始めたとのことだから、ラジオを聴き始めてからまだ数年。そしてたまきは、太郎が高崎記念病院に入院し、太郎から「ミイラ人間」と名づけられてからはじめてラジオを聴くようになったのだから、ラジオリスナーとしてはホンの初心者。その点、太郎とたまきと同年代の永田琴監督がどうだったのかはわからないが、多分大同小異……？

しかし私のラジオ歴は、太郎やたまきや鬼塚忠そしてそれよりも若い永田琴、三浦有為子のレベルとは大違い……？

『ミュージックエクスプレス』 vs. 『ヤンリク』『ヤンタン』

プレスシートには「ラジオが現在以上にリスナーへの影響力を持っていた1977年」と書いてある。しかし、私に言わせれば「ラジオが現在以上にリスナーへの影響力を持っていた1960年代後半」とさらに言い換えたい。

私が大阪大学に入学し、松山から大阪にやって来たのは1967年4月。その時代にスタートし、その後全盛をきわめていったラジオ番組が、朝日放送ラジオの『ABC ヤングリクエスト』（ヤンリク）とMBSの『MBS ヤングタウン』（ヤンタン）。ヤンリクは1966年4月から1986年10月まで放送された、リスナー参加のリクエスト音楽番組。またヤンタンは1967年に『歌え！ MBS ヤングタウン』として放送を開始したが、1999年秋に平日から撤退し、その後も徐々に撤退していったとのこと。そしてヤンリクからは笑福亭仁鶴が大人気となってブレイクし、ヤンタンからは桂三枝、笑福亭鶴光などの超有名タレントが生まれていった。

このように、1967年当時のラジオの深夜番組へのリスナーの参加は、2007年の今はもちろん、太郎が夢中になって聴いていた『ミュージックエクスプレス』とは比べものにならないほど熱気に満ちあふれていた時代だった、と私は思っているが……？

私とラジオ その1——小学校高学年から中学生時代

私が愛光中学に入学したのは1961年4月。そして私が片耳だけのイヤホンで、手帳くらいの大きさの音の悪いトランジスタラジオを聴き始めたのは、多分小学校4年生の頃。毎日夕方の時間帯に放送される連続ラジオドラマに夢中になっていた記憶がある。ところが、中学生になると今ドキのラジカセと同じくらいの大きさの、少し音のいいトランジスタラジオを手にすることができたから、中学生の私にはそれが宝物。あの当時毎週楽しみに聴き、自分でランキングを記録していたのが、文化放送が製作していた『全国歌謡ベストテン』。三橋美智也の『星屑の町』、橋幸夫の『舞妓はん』や『白い制服』など、数週間にわたってトップ1を維持していた曲は今でもはっきりと覚えているし、100パーセント完璧に歌える曲ばかり。

また、映画を観るようになってからは、貯めた小遣いでテープレコーダーを買うこ

とができたから、ラジオから流れてくる映画音楽などを一生懸命録音して聴いていたもの。ワイシャツのポケットに入る iPod と高性能のステレオヘッドホンがあれば、新幹線の中が立派なオーディオルームになっているここ数年の私の生活を考えれば、まさに感無量……。

しかし、小学校高学年の頃や中学生の頃は、たとえ性能は悪くともラジオは私にとって絶対欠かすことのできない宝物。もっとも、愛光中学・高校は松山における中高一貫教育の進学校だから、父親からも母親からもラジオを聴きながら勉強することについてはいつも文句を言われていたが、私は頑として私の流儀を変えなかった。同じ時間内に1つのことに集中しつつ同時にラジオを聴く、そんな私の離れ業は、小学生の時の必死の訓練によって培われたものなのかも……？

私とラジオ その2——大学時代

「私とラジオ」には高校時代はない。その理由は第1に、中学2年生からは週に1度はテレビで『ロッテ歌のアルバム』や美空ひばりの主題曲が1965年の日本レコード大賞を取った『柔』などいくつかの連ドラを観るようになったため、私の興味がラジオからテレビに移行したこと。第2に、さすがに大学受験を控えて周りのみんなが必死に頑張っている中、あまりの劣等生では国立1期の大学に入学できないのではという危機感が現実味を帯び、きっぱりとラジオを断ったため。

しかし、1967年4月に大学生となり、うっとうしい両親の元を離れれば、100パーセント自由な世界。そんな開放感の中、私は学生運動にのめり込むとともに、あちらこちらに恋の花を咲かせていった。そして昼と夜の生活は完全に逆転し、深夜のヤンリクは私にとって毎日欠かすことのできない生活の一部となった。1967年から1970年までの学生運動に明け暮れた3年間、ヤンリクで流れていたヒット曲で私が歌えない曲は1つもないと豪語してもよいほど(?)だ。

しかし一転して、1970年1月26日の21歳の誕生日に我妻榮『債権総論(民法講義Ⅳ)』を購入し、司法試験を目指す勉強を始めてからの1年半の間、私は一切の外世界の動きを知らない。たとえば、それまで当然のように熟知していたプロ野球の優勝チームは？ 首位打者は？ レコード大賞受賞曲は？ 等々……。私の1967年4月からの大学時代4年間プラス1971年3月の卒業後、司法試験合格発表のあった10月までの7カ月間の、「私とラジオ」をめぐる状況は以上のとおりだ……。

また、難病モノ……？

以上この映画のエッセンスとなる「ラジオ」について詳論してきたが、さてこの映画のストーリーは……？ それはまた、難病モノ。しかも難病モノ定番の白血病。もっとも今回の病魔の被害者(?)は、中学1年生で12歳の高野太郎クンだ。

別に難病モノが悪いわけではないが、『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)、『いま、会いにゆきます』(04年)、『アジアンタムブルー』(06年)、『Dear Friends デア フレンズ』(07年)等と続くと、日本映画のパターンが固定化してしまうのでは……？ また若者の難病モノはほぼ100パーセント恋愛モノ(悲恋モノ)と重なるが、12歳の男の子と女の子に本格的な恋愛をさせるわけにはいかないから、『小さな恋のメロディ』(71年)ばりに「小さな恋の物語」としたが、そのお相手は「ミイラ人間」こと海乃たまき。当初すごく元気そうで、何の病気かわからないまま入院してきた太郎に対して、交通事故のために全身はもちろん顔のほとんどが包帯で覆われていたため、ミイラ人間とあだ名されてしまったたまきは、半年の入院で治療が終わると無事退院。しかしその頃、太郎の白血病は……？

広末涼子の登場は……？

かつての(?)人気女優広末涼子は『パブルへGO!! タイムマシンはドラム式』(06年)以降映画に登場しておらず、最近少しカゲが薄いよう……？ この映画には冒頭、そんな広末涼子が深夜3時から放送されている番組を担当しているFM局のディレクター役として登場する。ラジオのDJ番組の生命線はファンとのつながり、つまりお便りやリクエストの数だ。しかし、深夜3時からのラジオ番組ともなればやはりそれは厳しいようで、とうとう番組の打ち切り(名目上は1カ月間の休養)が宣言されることに。

落ち込むたまきの耳に飛びこんできたのが1975年に大ヒットしたキャンディーズの『年下の男の子』。これは、現在FM局のディレクターという誰もがうらやむ仕事に就いているたまきにラジオの楽しさを教えてくれた、あの彼の思い出の曲だ。あの彼とは、曲のタイトルどおりたまきにとって1歳年下の男の子、高野太郎のこと。するとたちまちたまきの心は、あの海辺の病院で過ごした1977年にタイムスリップしていくことに。あの時たまきは、中学2年生……。

最初の病院選びが大切

太郎は野球好きの父親正彦の影響で野球選手を目指し、庭で素振りをするのが日課。もっとも、ホントに野球が好きなのか、それとも野球の実況中継を聴くのが好きなのかは微妙……？ もっとも、中学校ではきちんと野球部で活躍していたが、それもすべて自分流の実況中継つきだから、真剣味には若干問題あり……？

そんな太郎が母親ひろ子（西田尚美）に連れられて病院までやってきたのは、彼が時々鼻血を出すようになったから。また遠く離れた海辺の高崎記念病院に行ったのは、それまで健康だったため病院をほとんど知らず、太郎の叔母さんにあたるかなえ（村川絵梨）の勤めている病院なら安心というだけの理由。実際に診察してくれたのは若先生（佐藤重幸）だったが、アメリカ帰りをひけらかさず、すごく親切ないい先生。やはり病院を選ぶについては、こんないい先生がいる病院を選ぶことが大切……。

DJ 治療は大先生の思いつき

この病院の院内放送では昼休みにクラシック音楽が流されていた。これに興味をもった太郎はある日病室を抜け出し、音の発信源をたどっていくと発見したのは、壁いっぱい LP レコードが詰まった DJ ルーム。目を輝かせながらマイクを握り、DJ の真似ごとをやっていると、それを拍手で迎えたのが若先生の父親、通称大先生の高崎雄二（原田芳雄）だ。白血病の治療に何がいいのか？ それは私には全くわからないが、大先生が考えたのは太郎に大好きなことをやらせれば、それが治療になるのではないかということ。そこで始めたのが、いわば「DJ 治療」。まあ、マンガみたいな話だが、意外にもその効果があったらしいからビックリ……。ここでやっとこの映画に『Little DJ ～小さな恋の物語～』というタイトルがつけられていることがしっくりと……。

病院内の人間模様から学んだことは……？

もっとも、院内放送で DJ 番組が放送されることについては、賛否両論があるはずだが、この映画では賛成派が多数で反対派はごくわずか……？

個室より大部屋の方がいいという太郎の気持は私には理解できないが、太郎の入った 4 人部屋にいたのは、無愛想な捨次（松重豊）、穏和な結城（光石研）そして誰と

も口をきかない老女タエ（森康子）。また、この病院には別に子供ばかりが入っている大部屋もあり、そこにいたのがあの「ミイラ人間」たまき。

ある日太郎が目覚めると、結城のベッドが空いていた。かなえの説明では無事退院したとのことだが、さてその真相は……？ そして、そのベッドに移ってきたのが「ミイラ人間」たまき。男が2人いる病室に中学2年生の女の子が入ることは現実にはありえない話だが、こんな4人部屋での共同生活の中、太郎が学んだことは……？

『ラストコンサート』鑑賞デートの是非は……？

『ラストコンサート』（76年）は、余命いくばくもない父親を探している白血病の少女ステラと、ひょんな縁で彼女と知り合い父親代わりとなるかつての名ピアニスト、リチャードとの心の絆を、美しい音楽と共に描いた名作で、私も大いに感動した映画。そんな映画を中学1年生のたまきが観て感動したというのは驚きだが、それはたまきがよほど早熟だったため……？ そこでたまきがいつも口ずさんでいるのは、この『ラストコンサート』のテーマ曲。

たまきのお見舞いを受けた太郎が「その曲を歌って」と注文したのがきっかけで実現したのが、映画鑑賞デート。母親が売店に行っているスキに、太郎はたまきを連れてベッドを抜け出したが……。

この映画の感動を記憶しているたまきが、太郎との映画鑑賞デートで2度目の感動の涙を流すシーンは印象的。映画が思春期の少年や少女に与える影響力をあらためて感じた次第……。

もっとも、そこまでは良かったのだが、両親や病院の先生に黙って病院を抜け出したのはやはりまずかった。そのうえ、函館山の上で激しく降り始めた雨にあったのが大きな不運。雨が上がり美しい朝を迎えたのはいいが、この時既に体力の限界に達していた太郎はバタリと倒れ込み、救急車で病院に運び込まれることになったから大変。太郎とたまきの『ラストコンサート』鑑賞デートは、大きな痛手を背負いこむことに……。

告白と初キスそして最後のDJは……？

実はたまきとのデートに臨むについて太郎は、重大な告白をすべくコートの中に手紙を忍ばせていた。しかし、なかなかタイミングを見つけ出せないまま倒れてしまっ

た太郎は、呼吸もやっという状態。そして今、無菌状態にするべく、太郎のベッドはビニールで覆われることに……。

そんな中、太郎の望みはただ2つ。その1つは、大先生に頼み込んで病院の皆さんの期待に応えるべく最後のDJを放送すること。そしてもう1つは、見舞いにきてくれたたまきに対して勇気をもって「好きだ」と告白すること。だって、今言わなければ永久に言えなくなるかもしれないのだから……。この映画は、この2つの望みをめぐって最後に2つのクライマックスシーンが訪れてくるからそこに注目！

伝説のDJ 登場！

1970年代、太郎が熱心に聴いていた『ミュージックエクスプレス』のDJを担当していたのは尾崎誠（小林克也）。その伝説のDJ尾崎が、1993年再び『ミュージックエクスプレス』に登場することに。その実現のために頑張ったのは誰……？

そして今尾崎がかけようとしているレコードは、キャンディーズの『年下の男の子』だが、この曲をリクエストしたリスナーは誰……？ そしてその葉書には一体何が書かれていたのだろうか……？

ここに、20年の時空を超えた恋が成就……？

2007(平成19)年11月13日記